

見所の小雀（3）

雨中で観た「千手」 ～ 2010年4月23日 代々木能舞台 ～

代々木能舞台に初めて行って来ました。古いながら稀に見るほど風情のある本格的な舞台です。場所は初台・東京オペラシティから徒歩5分の住宅地、能楽師浅見真高、滋一さんの住居を兼ねています。玄関は何の変哲もありませんが、中に入るとオーッと声が出るほど。まず驚くのは、能楽堂で言えば脇正面の座席に当たる所が青天井の中庭になっていて、一の松、二の松、三の松と本物の松が植えられています。その中庭と舞台、見所の境の戸はすべて取り払われていますから、まさにオープンエア。それゆえ気候の良い4月、5月、9月、10月しか公演はないようです。見所は広い座敷二部屋続きで150人が入れるそうです。当日も満席でした。

この日は朝から、雨足が強まったり弱まったりしながら終日降り続け、4月下旬とは思えない真冬日でした。見所に入るとまずカイロと膝かけ、熱いお茶のサービス。私も持参した厚手の靴下、ダウンコートのお陰で寒さは感じませんでした。珍しい体験になりました。

しかし何より感動したのは、この夜の演目は「千手」だったので、まるで物語の再現のように雨だれの音を聞きながら観能できたことです。特にこの舞台は橋掛りの長さも十分あり、シテ（小早川修）が、橋掛りで「琴の音添えて訪る…。みちのくの忍ぶに堪えぬ雨の音…」とシトシトと実際に降る雨の中で謡うのも素敵なら、ツレ（浅見滋一）の悲嘆を帯びた謡も湿った中に引き立ちました。またワキ（森常好）が「今日の雨中の夕べの空…酒宴を始めんとす」と言うくだりなど、曲の最初から最後まで自然の醸し出す効果の素晴らしさは絶妙でした。

今回「千手」を観たいと思ったのは、言うまでもなく白謡会・春の会で私は千手のシテをするからです。一応無本ですのでシテ謡は覚えましたが、他のパートの詞章もかなり分かっていますから、こういう場合の観能というのは、他の曲とは又まったく別の味わいです。

ストーリーは手短かに言えば、平清盛の五男、重衡は源平一の谷の合戦で一軍を率いたけれど、捕虜となり鎌倉に送られ逗留していた。その一夜、頼朝の遣いとして気立てが良く美しい千手が、琵琶、琴を携えて重衡を慰めに訪れる。重衡は出家を願い出るけれど、寺院仏閣焼き打ちの重罪のため、それが許されないことが分かり、まもなく刑罰を受けることも。こういった緊迫した中で、つかの間の慰めとして酒宴を催し、琵琶、琴を奏でて夜半を明かす。けれど、翌日には重衡はまた都へ送り返されることになり、そこに重衡と千手との淡く(?)短い出会いと切ない別れがあるというものです。

私自身は何度も謡本を読んでいるので、私なりに千手への思い入れも大きく、気持ちも昂ぶっていましたが、能では千手の所作も思ったより、あっさりした感じ。もともと能は直載的な色気や感情をあまり出すものでないし、特にこの曲の作者・禅竹は曲のほのかな香りや、あるのでもなし、ないのでもなしといった曖昧さを好んだそうなので曲趣は理解しました。

それより再び能で感心したのは、今回は小道具は何一つなく、例えば「妻戸をきりりと押し開く…」と扇だけで、その情景を描くし、重衡と千手が琵琶、琴で合奏するのも扇だけ。その型がとても優雅で美しい！つまり扇一つで動作を抽象化して何でも表現してしまうところが凄いなと思いました。

ごく最近、私はある機会に人間国宝の片山幽雪（九郎衛門）さんとツーショットの写真を撮りましたが、背丈がほとんど私と同じ位。舞台ではもっと大きく感じていたので驚きました。反対に関根祥六さんからは背が高いのを芸で打ち消す苦勞を聞いたことがあります。最近の演者には長身の方が多く、曲の役柄によっては良いこともあるけれど、鬘物を演じる時は立姿が間延びした感じになり難しいなと思うのは私だけかしら？（尾崎記）